

ドラッカー・ブックレビュー

高次の精神への飛翔

P・F・ドラッカー／上田惇生訳『[英和対訳]決定版 ドラッカー名言集』ダイヤモンド社

評者 井坂康志

ドラッカーという人を思うとき、その相貌は私にとって常に経営学者ではない。まずもって卓越した言語の使い手だった。

その一つの証左として、不思議なことに、同じ話を何度聞いても得した気持ちになる。むしろ同じ話を何度でも聞きたい。聞くたびに心に新しい波動が生まれる。

ドラッカーは次の100年を創造する思想家の相貌を帯びつつある。今さまざまな意味で彼の真価が言われる。一種のブームでさえある。少なくとも私の知る限り、本当の意味で死して後現実世界を変えたのはキリストとマルクスくらいである。ともに道具は言語だった。

言語であるならば、翻訳には原著と同等の責任がある。ドラッカーと上田氏の関係は、ゲーテとエッカーマンのそれに似ている。ともに親子ほどの年齢の違いがありながら、精妙な親和力に貫かれていた。しかも、エッカーマンが意図せずしてゲーテから最良の思想を引き出したように、上田氏はドラッカーの頭脳にきらめく砂金のようなフレーズを見事にすくいだしている。

ゲーテはいう。「私の詩はすべて機会の詩だ。すべて現実によって刺激され、現実に根拠と基盤を持つ」（『ゲーテとの対話』）。まさしく本書もドラッカーと上田氏の内面的対話の産物である。

ところで、名言の価値とは誰が決めるのか。話者が意図して吐いた言語が名言になるとは考えづらい。少なくともその成立機縁は話者の意図にはなく、反対に言語の受け手の感受性によって創造される。

本来ならば水がろ過されて純度を上げていくような長い時間的プロセスが必要なかもしれない。だが、ドラッカーのおもしろいのは、存命中から名言集が出版されていたことだ。いささか拙速に思えなくもないが、そこが生きながらにして古典を書いた者の特権というべきなのだろうか。まさに彼こそそのような種類の書き手だったのも確かである。

ドラッカーが自らのファーストレベルを書き手としたのも、自らの立ち位置を正確に理解していた証だった。彼が若い頃尊敬してやまなかったジャーナリストにカール・クラウスがいる。ウィーン文化を代表する書き手の一人であり、長編戯曲『人類最後の日々』は日本でも知られたものの一つである。

そのクラウスが言う。「思想とは言葉遊びの結果紡ぎだされる」。この名言集をめくるほ

どに、なにがなしくラウスのこの一文に思いが及ぶ。

たとえば、「日常化した毎日が心地よくなったときこそ、違ったことを行うよう自らを駈り立てる必要がある」。

言葉が一つの世界として生きて脈動している。韻律をはらんでいる。月並みな人生訓とも違う。何かを教えようとか説こうという姿勢はない。ただそこにあるがままの状態を自然な言語の組み合わせで表現する。言葉自体が思想なのだということを教えられる。

さらに、それまでの名言集と異なるのは、英和対訳のスタイルをとっているところにある。英文併記というのは、実は英語学習以上の意味を持つことが多い。というのも、一般に流通する英和対訳の書物の大半は文学書である。日本人は明治時代から高度な訳詩文化を持っていたが、同時に原語による作品鑑賞を怠ることがなかった。夏目漱石が漢詩の教養を持ちつつホイットマンやワーズワースの原詩を愛したのはよく知られる。

というのも、言語にはある種の美観というか、ほのかな香りのようなものが伴う。どの言語であれ、作家の魂を表出する限りにおいて文章には凜とした状（すがた）が映しこまれる。「文」は人なりというが、それ以上に「文体」こそがその人自身である。ドラッカーの発する一文一文は鋭く現実をとらえつつ、同時に普遍の次元にまで飛翔し時空を突き抜ける。

すぐれたフィルムを見たあのような生の神経に直接触れるような清冽な感覚を呼び起こす。あたかも、自ら直覚した現実がそのまま第三者の視覚を通して詩的言語に置き換えられたような錯覚をもたらす。その感覚は世の有識者や政治家、新聞記者の言うことと違おうし一般に流布された世間語とも違う。虚飾なきあるがままの現実である。

すぐれた詩人が人類になり代わって言語を紡ぎだすように、一人ひとりがドラッカーの言語に自らの精神活動とそのリズムを同期させる。だから本当の姿をとらえた言語ほどに人の心を癒すものはない。また、勇気を与えてくれるものはない。

最後に蛇足ながら、本書にノンブル（ページ数）がない。柱もない。せつかくの名言も訓詁学になっては意味がない。言語とはその意味で常に諸刃である。ドラッカーの名言集が、かつての「毛沢東語録」にならないことを願う。扱いには気をつけなければならない。そのためには「読む」という強迫観念から解放されて、ぱらぱらとめくるのがいい。ノンブルがないのははからずもポストモダン的なドラッカー流の粋なはからいにも思えてくる。